

人文会ニュース

2005. 8

巻頭エッセー 紙と活字の本はなくなるのか？	柳父 章	1
書店現場から 「激戦区の札幌から」	菊地貴子	3
社会学への 15 分ツアー	大澤真幸	5
大学図書館がいま目指したいこと	井上真琴	18
出版業界の構造変化と書店間競争	星野 渉	30
新しい年度にあたって——代表幹事あいさつ	佐藤英明	39
人文会年次総会報告		
委員会活動方針		
人文会ホームページ・リニューアルのお知らせ		

東京都文京区本郷5-30-20 電話03(5684)0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp

紙と活字の本はなくなるのか？

柳父 章

物書きという職業、本という文化財のあり方が、いま根本的に変わろうとする時代にさしかかっているのではないかと漠然とながら予感する。

物書きという仕事や、本の起源は、おそらく文字の出現とほとんど同時に始まっていたのではない。文字の出現は、今から約五千年の昔、メソポタミアで、いわゆる楔形文字であろうが、考古学などで知られている限りでは、それは、粘土板に刻まれていて、いわばその書き手の神官だか書記だかが物書きの先祖で、粘土板は本の先祖ということになるのだろう。

人類の文明は文字とともに始まった、と私は考えている。粘土板の昔から今日まで、粘土はやがて板になり、紙になり、ついにインターネットの画面になった。木のへらは筆になり、ペンになり、今ではパソコンのキイになった。ここまで来た、この変化は、単に便利になったというだけの変化と言ってよいのだろうか。

たとえばこの文章は、パソコンで書いて、編集者にメールで送る。今日でも、原稿用紙にペンで書き、封筒に入れて送るという物書きももちろんいるが、おそらくパソコンやメールは、もう明らかに多数派だろう。

さらにもう一歩先では、インターネットの画面で「本」を読む人々がいる。そこに直接書く物書きもいる。私じしんも、自分のホームページに、ちよつとした論文を書くこともある。こういう成り行きは、紙と活字の世界と比べるとまだ小さいようだが、どうも事態はおそろしく、今後急速に広がって展開していくのではない。

事態の推移を予感しているような動きもすでにある。たとえば、文芸家協会などでは、物書きの作品が、ケータイなどを通じてインターネットに流出している中での、著作権のあり方をしきりに問題にしている。どうやらその様子は、著作権所有者たちの恐れの子感を反映しているようにも見える。その著作権であるが、それは紙と活字の時代の産物であって、すでに有害無益であるとして、音楽などの著作権といっしょに、これを無視するようなソフトを作った人も現

れた——この人は犯罪者か、それとも先覚者か。

大きな視野で歴史を振り返ってみると、表現媒体の大きな変化は、必ずその表現内容の画期的な変化をもたらしている。言葉が、音声という媒体から文字へと変わって以後、言葉の広がり、空間的にも時間的にも莫大な領域に広がることになった。以後、人類の文明の歴史が始まった。

そしてやがて、その文字表現の媒体が筆記から活字印刷に変わって以後、文字の広がり、さらにはひろくなり、不特定多数を読み手とする書物が出現し、西洋では、カトリックに対するプロテスタントの宗教改革を引き起こした。日本では、黒船以後、学校教科書や新聞の活字媒体が、近代日本の精神をつくり出してきた。

今日のIT媒体による表現形式の変化は、文字の出現や、活字印刷の出現にも匹敵するような画期的変化となるのだろうか。

活字媒体と比べると、IT媒体は、空間的な伝播力が格段に広い。国境を越えて、瞬時にコミュニケーションできる。しかしその反面、時間的持続に弱い。ホームページは不断に更新されるし、最近流行のブログは日々変わって消えていく。研究者にとって、ネットは資料として便利だが、文献として用いるには持続性に欠けるので不安である。著作権というのは、物書きの一生の時間以上ほどの持続を前提としているのだが、これにも矛盾する。空間に強く時間に弱いというのは、IT媒体の本質的な性格のようで、たとえばIT媒体の図書館のようなものは難しそうだ。

ここで、活字文明支持者はほっとするかもしれない。しかし、問題はIT媒体の側からも考える必要があるのではないか。すなわち、表現の歴史が示してきたように、媒体は内容を変革するかも知れないのである。

これから先のことは、今の私には、漠然とした予感くらいしか言いようがない。

だが、一つ言えるのは、こういうIT媒体の側から、活字媒体というものを改めて見直し、考え直すきっかけにすることができるといふことである。とくに、その特徴として浮かび上がった本や活字の時間的な持続性というものは、いったいどれだけ信頼するにたりののか。物書きにとって、書いたものを残すことにはどれだけ意味があるのか。本がいつまでも残ることに果たしてどれだけの意味があるのか。それを考えるだけでも、私たちに、よい緊張感を与える。

(やなぶ あきら・翻訳文化論専攻)

「激戦区の札幌から」

菊地 貴子

毎朝、札幌グランドホテルを磨いている。開店前の掃除でお店の正面入り口のウィンドウを拭き始めると、札幌駅前通りをはさんでガラス越しにそびえるグランドホテルを、上から下までせつせと磨いているような気分になるのだ。札幌の中心部、大通りと札幌駅の真ん中に位置するこのなにわ書房に入社して、早いもので十四年になる。入社したばかりの頃は、よく会社の備品を壊して、社内で「壊し屋」の異名をとっていた。本好きが昂じて入社したクチなのだが、文庫の担当になってからも、どう考えても売れない本を棚に揃えてみたり、必要の無い絶版リストを作っては一人、ほくそえんだりしていた。今考えると本当にめまいがするのだが、売れる本と売りたい本の区別がつかなかったのだと思う。その差に気が付いたのは、店頭に立ち、実際に発注作業をこなして、お客様のニーズがおぼろげながらもわかるようになってからだった。その後、お店の改装や、姉妹店への出向を経て数度の担当替えがあり、今は文芸書を担当しつつ、日々、店内に目をはしらせている。

仕事内容の変遷はさておき、ここ数年でガラリと変わったのは、札幌の書店事情である。商圈としては札幌駅前近辺より、デパートの林立する大通り界隈がダントツに有利だったのだが、おとしの春、札幌駅の再開発にともない、駅の東側には地上三十七階のJRタワーが、西側には大丸札幌店が開業し、その二つを結ぶショッピングモールも併設されて、状況は一変した。

まず、そのタワー内の施設に、旭屋書店が旧店舗から移転し、大丸には三省堂書店が出店した。それぞれ、八十万冊、二十万冊という品揃えである。それを塗り替えるように昨春秋、百万冊の在庫を誇る大型店、コーチャンフォーが郊外に二店舗目の出店を果たした。そしてこの春、通りを挟んで大丸の隣のビルに、これまた鳴り物入りでオープンしたのが、紀伊国屋書店（在庫八十万冊）である。

先日、一日がかりで先の書店、全てを見てまわった。それぞれ二時間ずつはいただろうか。棚と棚との導線や売り場



筆者近影

の広さ、何より新しい店舗。その在庫量に、ただ圧倒されるばかりだった。大型書店は郊外に出店し、ナショナルチェーンがこぞって札幌駅に出店を決める中、百坪弱の我が店は、二フロアで五万冊と、取り巻く状況にかなり厳しいものがある。店舗の規模もその売上も、自分の店の頭上を通り越し、札幌駅へと向かっているように思えてきて、大通りへと帰る道すがら、まるで時流に逆らって反対に歩いているかのような錯覚にさえ陥った。

数日後、店頭で本の整理をしながら、悶々と棚の品揃えをチェックしていると、年配のお客様に本の在庫を聞かれた。お持ちになったメモには雑誌一冊と文芸書、文庫が二冊書いてある。一階で揃う商品で、運良く在庫は全てあった。レジで会計を済ませると、お客様は「ここは一回りするとだいたい（本が）揃えられるわね」と言い、ニツコリと笑って帰って行った。

その一言にんだか救われる思いだった。あらためてお店の棚の一つ一つをチェックしてみる。数点積みで飛ぶように売れている平台の本。その後に、地味ながらも確実に一定部数は売れていく本。面陳や棚に収まってはいるが無くてはならぬ本。etc.。それら全てで一つの世界をなしているならば、この書店業界も同じ事があてはまるのではないだろうか。

入社時とはだいぶ変わった棚の品揃えを眺めながら、「売りたい本がある」と今は言えると思った。現象となるような売れ方をするベストセラー。その一方で、棚に背表紙を見せている本の数々。その本にまつわる思い出や記憶。ひいては、ベストセラーと棚ざしの本を含めた書店の空気そのものを売りたいと、強く思ったのだ。

今さらながら、かゆいところに手の届く接客と、小さなお店だからこそ売れる側の顔の見える品揃えができる書店でありたいと、痛切に思う。自店の棚と日々格闘し、もちろん売れる本もアグレッシブに売りながら。

(きくちたかこ・札幌なにわ書房グランドホテル前店店長代理)

社会学への15分ツア―

知は、固有の主題をもち、それに応じて境界設定されるとき、その知のうちにさまざまな問題を包摂しうる普遍性を獲得する。社会学を定義する固有の主題とは、「現実的あるいは可能的な社会秩序（反秩序）はいかにして可能か」という問いにある。

社会学という知の歴史は、浅い。しかし、その二百年弱の浅い歴史の中にも、創造的な絶頂期と見るべき時期がある。それは、――人類の他の多くの知のジャンルと同様に――一九世紀の最末期から二〇世紀の初頭にかけての期間である。タルド、テンニース、ジンメル、パレート等のビッグネームが、この時期に活躍している。今日でも読むに値する重要な社会学者の、こうした同時的な大量輩出は、これ自体、社会学的な考察の対象となりうる社会現象である。この時期の社会学を形成する数多あまたの高峰の中でも特に傑出しているのは、エミール・デュ

大澤真幸

ルケムとマックス・ウェーバー、とりわけ後者であろう。ところで、ウェーバーが、重い鬱症状に悩まされたことは、よく知られている。彼は、この病気のために、大学教授の職を辞さなくてはならなかった。だが、不思議なことに、彼の数多くの論文の中でも、最も有名で重要な二つの論文――したがって社会学そのものの歴史の中でも最も重要な論文の内に数えられる二つの論文――は、病が発症し、一瞬、緩和した直後に、書かれているのだ。二つの論文とは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫）と『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』（岩波文庫）である。鬱の中でこそ、こうした社会学的存在のメタ社会学的な最高傑作が物されていることを思えば、まさに鬱を結節するような態度と、社会学という知を可能にした態度とは共通のものではないか、と推測することができるだろう。

私は、決して、彼の個人的な病に過剰な意味を与えて
いるのではない。というのも、ウェーバーの鬱は、「個
人的な」病ではないからだ。もし、ある時代、ある社会
を、それ固有の感情によつて特徴づけることができるの
だとすれば、一九世紀後半から二〇世紀序盤にかけての
西欧を特徴づける感情は、まさに「憂鬱」である。この
時期の知性によつて、われわれは、「憂鬱の群像」とで
も呼ぶべきものを得ることができ（フロベール、ボ
ードレー、テニソン、ハーデー、ユイスマンス、後期
のマーク・トゥウェイン、後期トルストイ、イプセン
……）。ウェーバーの病は決して孤立したものではない。
社会学的な想像力の生産性の急激な高まりと同様に、憂
鬱もまた社会現象だったのだ。

だが、社会学を可能にした態度、ウェーバーに深い憂
鬱をもたらした態度とは、何だったのだろうか。鬱の中
で書かれている、先に挙げた論文、とりわけ社会学的な
方法自身への反省をふくむ「客観性」論文が、この点に
関してヒントになる。ここで、ウェーバーは、「価値自
由」なる有名な概念を提起している。価値自由とは、普
通、事実判断から価値判断を除去すべきであるとする、
科学的な客観性への要求であると解されている。だが、
こうした要求は、同じウェーバーの次のような言葉と合

わせて理解すべきだ。「合理的な経験主義が、世界の脱
神聖化と世界の機械的因果関係への転換を完成したとこ
ろではどこでも、その結果として、『世界は倫理的な意
味へと方向づけられるような形で、神によつて秩序づけ
られたコスモスとして見る事ができる』とする倫理的
な態度との間に、強い緊張関係が生じた」（『宗教社会
学』創文社）。このように記述された事態を背景にして、
価値自由を捉えるならば、そこに、われわれは客観性へ
の学的な要請を越える、悲劇的なパッションを見るべき
ではないか。ウェーバーの深い憂鬱は、こうしたパッシ
ョンによつてこそ、引き起こされる。社会学は、ウェー
バーをその深い憂鬱の淵に落とした精神の系譜の中にあ
る。

さて、ここで、私は、今日の社会学界の現況を概略的
に掴むための、一種の読書案内を書いておこうと思う。
これは、社会学とは何かということへの体系的な記述で
はない（そういうことは、別のところで書いたことがあ
るので）。これは、社会学という知の世界への「半日ツ
アー」のようなものである。観光地に行くと、しばしば、
その地域の重要なスポットをつまみ食いに手軽に見て
回る「半日ツアー」「一日ツアー」というものがある。
長年、そこに住んでいてさえも、その地域のことをほん

とうには理解できないのだから、半日や一日のツアーでは、何もわからないし、むしろ、何かわかった気分になさせてしまうという点では、そうしたツアーは、有害でさえあるのだが、忙しい人は、どうしてもこうしたものを利用してしまう。ここに書く社会学の案内も、こんなものだということを念頭においてほしい。一応、「分野別」に扱うが、こうした分野の分け方自体が、暫定的なものである。

一 社会学理論

現在の基礎理論の領域は、群雄割拠、あるいは「神々の戦い」の場と言うほかない。こうしたアナキーの主たる原因は、マルクス主義の理論的な影響力の低下にある。無論、すべての社会学理論が、マルクスを肯定的に継承するものだったわけではない。というかむしろ社会学の主流は反マルクスであることにこそ、自身のアイデンティティの根拠をおいていた。が、そうした反マルクスの潮流も含めて、かつては、マルクスを規準にして、理論の布置が決まっていた。

とはいえ、しかし、良質のマルクス主義系の理論は、——マルクス自身の著作を含めて——今日でも、古びてはいない。ひとつ重要なものを挙げるとすれば、真木悠

介の『現代社会の存立構造』（筑摩書房）を取りたい。疎外論・物象化論を基軸にして、近代社会を捉えるための根幹的な図式を、これ以上にはないほどに贅肉を削ぎ落とした文体で提示している。その背景には、廣松渉のマルクス解釈がある。ほかにも、フランクフルト学派をはじめとして、マルクスを現代的に摂取した社会学理論の構築の試みは、あまりにも多い。

反マルクス主義的な社会学理論の中心には、かつては、機能主義の社会学理論があった。一九七〇年代に、東大出版会から公刊された『社会学講座』には、機能主義理論は、社会学を通常科学化するだろう、と記されている。機能主義理論の特徴は、社会を、機能要件の充足を目指す目的論的なシステムと見なす点にある。その理論的な中心人物は、パーソンズである。パーソンズが機能主義の基礎づけのために書いた『社会的行為の構造』（木鐸社）は、社会学史のテキストとしても優れている。二〇世紀の中盤に書かれた『社会体系論』（青木書店）や『経済と社会』（岩波書店）によって、パーソンズの機能理論は体系化された。日本でも、吉田民人、富永健一、小室直樹など、七〇年代・八〇年代に学界で影響力のあった理論家は、皆、機能主義を標榜していた。アレクサンダー等

「新機能主義者」たちが、パーソンズの理論を継承してはいるが、機能主義は、かつてのような圧倒的な影響力を、今ではもっていない。

一九七〇年以降の時期には、機能主義への批判や言語論的転回の影響もあって、人間の意味付与活動や言語行動に着目する理論が、次々と登場した。最も重要なのは、シュッツ（『社会的世界の意味構成』木鐸社）に端を発する、現象学的社会学である。その理論的な集大成は、バーガーとルックマンによる『日常世界の構成』（新曜社）である。「意味」に着眼する理論として、現象学と並んで重要なのは、ガーフィンケルが創始したエスノメソドロジーである。エスノメソドロジーは、今日では、精緻な会話分析に発展的に受け継がれ、認知科学等の諸分野とも交流している。レヴィーストロース等の構造主義もまた、社会学理論の領域では、こうした「意味」や「言語」に優越性を認める諸理論とともに導入された。日本では、八〇年代後半に、橋爪大三郎（『言語ゲームと社会学理論』勁草書房）や落合仁司（『保守主義の社会学理論』勁草書房）等が、ウィトゲンシュタイン、ハート等の理論を摂取しながら、構造主義のインパクトを社会学理論へと統合する試みが図られた。現実を社会の諸成員の相互作用に媒介された構築物と見なす「構築主義」の

原点は、ここに紹介したような「意味」や「言語」に重点を置いた社会学の諸潮流である（構築主義の応用編として広く読まれているのが、たとえばスペクターとキツセの『社会問題の構築』（マルジュ社）である）。

冒頭に述べたように、社会学の根本主題は、社会秩序の可能条件を探ることにある。この主題を探究するにあたって、ミクロな行為（あるいはコミュニケーション）とマクロな社会秩序の間の自己準拠的な循環関係を根源的なものと見なす諸理論が、二〇世紀末期には、いくつも提起された。ギデンズの「構造化」理論やブルデューの「プラチック／ハビトゥス」の理論等である。中でも、社会システムを、コミュニケーションを要素とする「オートポイエシス（自己創出）的システム」として捉えるルーマンの社会システム論は、ずばぬけた精緻さをもっている（『社会システム理論』恒星社厚生閣）。私の『行為の代数学』（青土社）もまた、社会システムとその要素の自己準拠性を記述し、説明しようとする試みの一つである。

二 身体・自我

一見、社会性の対極にあるように見える、身体や自我もまた、社会学的探究の対象である。この領域の重要な

理論的成果としては、やはり、真木悠介の『自我の起源』（岩波書店）を挙げないわけにはいかない。社会生物学や動物行動学等をも参照しつつ、動物的な個性性と人間的な自我との間の連続と断絶を明快に抉出してみせる。私は、身体に規準をおいた包括的な比較社会学を構築しつつある。これは、身体の有する本源的な社会性が産出する超越的な他者（第三者の審級）の諸様態を規準にして、社会システムの存立機制を解明し、類型化する試みである（『身体の比較社会学』勁草書房）。世界的にも、身体は、八〇年代以降の社会学のホットな主題である。ここでは、翻訳もある、ブライアン・ターナーを代表的な論者として挙げておこう（『身体と文化』文化書房博文社）。

具体的な相互作用の場面において、「自我」がどのようにに演出されるのか、ということに関する繊細な記述としては、ゴフマンの仕事が、古典と見なされている（『儀礼としての相互行為』法政大学出版局、等）。日本では、たとえば浅野智彦の『自己への物語論的接近』（勁草書房）が、自己・自我が語りの中でどのように構築されるかを、分析している。この本は、「私探し」にいそしむ若者たちの心をよく捉えている。

後に言及するフーコーの権力論に触発された、社会学

的な身体論は、あまりにも多い。この領域での、日本における代表的な論者は、市野川容孝である（『身体』岩波書店）。無論、海外にも、この種の研究は数え切れないほどある。医療社会学のアームストロング等が、よく知られた研究者であろう。

三 性・ジェンダー・フェミニズム

社会学は、身体に付与される、様々な差異や役割に注目し、またそれらを相対化してきた。中でも性的な差異は、特別な差異である。それは、還元が最も困難なものしかすると不可能な——差異だからである。この問題への社会学的な探究は、言うまでもなく、フェミニズムと切り結んでいる。

今さら述べるまでもないことだが、日本で、この分野をリードしてきたのは、上野千鶴子である。彼女の仕事は、学者としてのそれをはるかに超えているが、彼女のアカデミックな著作を一冊だけ挙げるとすれば、『家父長制と資本制』（岩波書店）であろう。これは、マルクス主義フェミニズムを導入し、解釈しつつ、家父長制と資本制の交錯する様を、とりわけ家事労働に注目しつつ解明しようとした研究である。上野までのフェミニズムを反省し、相対化する、より若い世代のジェンダー研究

やフェミニズム研究も、登場しつつある。代表的な論者は、吉澤夏子（『女であることの希望』勁草書房、『フェミニズムの困難』同）である。

海外のフェミニズムやジェンダーに関する理論家として、現在、最も注目すべきなのは、やはりバトラーであろう（『ジェンダー・トラブル』青土社、等）。バトラーは、最も洗練された構築主義者ではないだろうか。彼女は、フロイトのメランコリー論を応用して、きわめて独創的なジェンダー化の理論を提起しているが、後続の学者たちに、十分に検討されてきたとは言えない。バトラー同様に、ラカンやデリダの議論を独創的な仕方で摂取して、フェミニズム理論を創造しつつあるドウルシラ・コーネルの著作も、近年、いくつか邦訳されている（『女たちの絆』みすず書房）。

性についての歴史社会的な研究として最も重要なのは、言うまでもなくフーコーの業績だが、日本人の研究者による著作としては、赤川学の『セクシュアリティの歴史社会学』（勁草書房）を挙げておきたい。近代日本のセクシュアリティの形成史を、とりわけオナニーをめぐる言説を中心にして、緻密に跡づけている。また、西欧近代（とりわけフランス）における、男性間の友愛の形成・展開の歴史を社会的に探究した書物として、葛

山泰央の『友愛の歴史社会学』（岩波書店）がある。

四 親密圏・家族・教育

私の学生時代と比べて、社会学を志す学生や若手の研究者の中に、家族をはじめとする親密な関係性に学問的な関心をもつ人の比率が高い。この領域の重要な研究としては、まずは、ギデンズの『親密性の変容』（而立書房）を挙げるべきだろう。ギデンズによれば、近代社会の特徴は、再帰性を制度化した点にある。この特徴が、親密な関係性にまで浸透した後期近代においては、「純粹な関係性」への指向が急速に高まる、と論じられる。

家族に関する歴史社会学の研究として、アリエスの『子供』の誕生（みすず書房）は、すでに完全に古典である。幼児期とも成人期とも区別された「子供期」は、近代の産物であったということを論証したのがこの著作である。その後、アナール学派やフーコーの影響を受けて、「××の誕生」といったタイトルの研究が、国内外の歴史学・社会学の領域で次々と登場するが、アリエスのこの本は、この種の研究の嚆矢であり、かつ最も良質なものの一つである。

日本の社会学者による「家族」や「家」の研究にも、もちろん、相当な蓄積がある。中野卓の同族団の研究や

森岡清美の家族周期説等は、すでに学界の共有財産である。ここでは、現代の家族について論ずる、現役の学者の研究にのみ少しばかり触れておこう。落合恵美子の『21世紀家族へ』（有斐閣選書）は、多くの大学でテキストとして使用されている。これは、日本の現代家族の変容を論じた著書だが、人口学が、どれだけ大きな説明力をもつかを実感させる内容となっている。パラサイト・シングル等の造語で有名になった、山田昌弘も落合と同世代の家族社会学者である。もはや、その内容を紹介するまでもなからう（『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書）。また、少子化対策を批判した、赤川学の『子どもが減って何が悪いのか』（ちくま新書）は、賛否が大きく分かれはしたが、学界でもかなり話題を呼んだことは確かである。

家族との関連で、教育社会学についてもこの文脈で、若干ふれておこう。教育社会学の研究は、実践指向性の高いものも含めて、あまりにも多い。ここでは、歴史社会学的な研究を二つだけ紹介しておく。一つは、竹内洋の『立志・苦学・出世』（講談社現代新書）。これは、『受験生』に特有な心性や環境が、明治・大正期にどのようなに形成されてきたかを論じたもの。刈谷剛彦の最新著『教育の世紀——学び、教える思想』（弘文堂）は、

近代社会の中で、高等教育という理念と制度がどのようにに生み出されたかを考察したもので、今日教育改革を考える上での示唆も大きい。

五 都市・農村・環境

都市と農村は、社会学の伝統的なフィールドなので、実証的あるいは理論的な研究の蓄積はあまりに膨大だ。ここでは、日本人の学者による、しかも比較的広く読まれている——あるいは読まれうる——研究を、ごく簡単に紹介するにとどめる。

一九七〇年代・八〇年代は、都市論がブームだった。それゆえ、都市社会学にも関心が集まっていた。そうした中で書かれたのが、吉見俊哉の『都市のドラマトウロジー』（弘文堂）である。これは、明治以来の東京の盛り場の位置の変遷を追いながら、「日本の近代の変容」の論理を抽出しようとした試みである。近代化を、社会の総体的な都市化であると見ることもできる。それゆえ、都市論を通じて、近代を考えることができるのだ。吉見のこの著作は、一九八七年の著作で、そのときの渋谷を描くところで終わっている。それ以降の東京（渋谷）の変化は、北田暁大の『広告都市東京』（広済堂出版）が、吉見を引き継ぐようにして記している。さらに、秋葉原

を論じた、森川嘉一郎の『趣都の誕生』（幻冬舎）を合わせて読めば、東京論としては完結するだろう。

だが、都市は近代にのみ存在しているわけではない。若林幹夫の『熱い都市・冷たい都市』（弘文堂）は、都市を、否定性を孕んだ定住の様式として捉える、都市の一般理論を提起している。逆に、都市体験の近代性を、文学社会学的な手法で説明しようとしたのが、富永茂樹の『都市の憂鬱』（新曜社）である。富永のこの研究は、社会学の自己反省、社会学の近代性を捉えるための示唆を含んでいるという点でも、興味深い。冒頭に述べたように、社会学は、憂鬱の精神の系譜の中にあるからである。

かつて、農村社会学は、日本の社会学の中心的な領域であった。鈴木栄太郎、福武直など、もともと影響力のある社会学者は、農村社会学者だった。今日でも、農村調査は、頻繁に行われているが、農村から社会の全体性を捉えることは、今では難しくなっている。かつて農村社会学に向けられていた問題意識は、現在では、環境問題について考察する「環境社会学」の中に発展的に吸収されているように思える（飯島伸子『環境社会学のすすめ』丸善ライブラリー、鳥越浩之『環境社会学』放送大学教育振興会、等）。

六 権力、国家、ネーション、帝国

権力という現象は、社会学の最も魅力的なテーマである。権力論の領域では、フーコーによって、大きなブレイクスルーが果たされた。古典的には、権力は、否定的な選択肢によって他者を威嚇すること、つまり殺す権力であるとイメージされてきた。だが、『監獄の誕生』（新潮社）や『性の歴史』（同）において、フーコーは、「殺す権力」は、伝統社会の権力であって、近代の権力は、逆に「生かす権力」であること、そして「主体」なる形象は、その生かす権力の効果として産出されること、こうしたことをきわめて説得的に示したのであった。フーコーが切り開いた地平の中で、歴史社会学的な研究を行うことが、若い社会学者のトレンドとなった。

権力論は、国家やネーションに関する理論と接続する。地域研究ではない、ナシヨナリズムの一般理論としては、三人の論者が重要だ。アンダーソン（『想像の共同体』NIT出版）、ゲルナー（『民族とナシヨナリズム』岩波書店）、スミス（『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会）の三人だ。それぞれ、異なった事実をネーションの原因と見なす。アンダーソンとゲルナーは、ネーションの起点は近代だとし、それぞれ、「出版資本主

義」「産業化」を原因だと指摘する。スミスは、ネーションは、前近代以来の民族的な共同体（エトニー）が成長したものであると論ずる。

二一世紀に入ってから、グローバルな社会を、帝国との類比によって捉える理論が流行している。ネーションや国家をそうした帝国の中で相対化して、位置づけるのだ。こうした理論には、しかし、前史とも言うべきものがある。たとえば、一六世紀以来の世界を、西欧を中心とする国際分業体制（階級関係）として描く、ウォーラーSTEINの「世界システム論」が、そうした前史に当たる（『近代世界システム』Ⅰ・Ⅱ、岩波文庫）。あるいは、西洋中心の世界システムを、主観的な表象の局面において捉えた、サイードの『オリエンタリズム』（平凡社ライブラリー）もまた、前史に加えてよいかもしれない。こうした議論を、継承し、現代化する形で登場した

のが、ネグリとハートの『帝国』（以文社）である。これによると、現代の地球社会は、巨大なローマ帝国のようなものである。この帝国に対抗する多様な労働者たちが、「マルチチュード」と呼ばれる。

七 宗教

宗教こそは、社会学の根幹的なテーマである。このことは、創造的絶頂期（二〇世紀初頭）の偉大な社会学者は、しばしば、宗教社会学者だったということが、よく示している。ウェーバーは、冒頭にふれた「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を含む、宗教社会学の論集をライフワークとしていたし、また、デュルケムも、『宗教生活の原初形態』（岩波文庫）をはじめとする著作で、宗教を論じてきた。こうした巨人たちが宗教を精力的に論じたのは、宗教こそが、社会の全体性を理

◆世間を賑わす小学校英語の是非を問う！

小学校での英語教育は必要ない！

大津由紀雄 編著

文科省が小学校英語の導入を進めようとする中、英教育界の第一線で活躍する論客たちが、問題提起し、その導入にあえて反対を唱え、警鐘を鳴らす。

●1890円

好評既刊！

小学校での英語教育は必要か

大津由紀雄 編著

●1890円

慶應義塾大学出版会

【図書目録送呈・価格税込】
〒108-8346 東京都港区三田2-19-30
Tel 03-3451-3584
Fax 03-3451-3122
<http://www.keio-up.co.jp>

解するための鍵だからだ。

だが、それにしても、日本人は、宗教、とりわけ世界宗教について、あまりにも無知である。世界宗教について、手っ取り早く知るには、小室直樹や橋爪大三郎の著作が便利である。たとえば橋爪の『世界がわかる宗教社会学入門』（筑摩書房）は、いくぶん不正確な記述もあるかもしれないが、重要な宗教を網羅的に扱っており、初学者には都合がよい。宗教の本質を、まったく抽象的・理論的に扱った独創的な研究としては、落合仁司の仕事がある（『神』の証明』講談社現代新書）。落合が直接に念頭においているのは、ギリシャ正教だが、そこから、宗教の宗教たる所以を、まったく数学的に導出してみせる。

現代日本の新宗教に関しては、島蘭進や井上順孝等が、実証研究を含む多数の著書を公刊している。私自身は、かつて、オウム事件に即した、現代日本社会論「虚構の時代の果て」（ちくま新書）を書いたことがある。ここで私は、日本の戦後史を「理想の時代」から「虚構の時代」への転換として捉え、オウム事件を後者の限界点に位置づけた。

八 近代の自己意識

社会学とは、近代社会の自己意識の一形態である。社会学は、すべて、直接的・間接的に、近代社会とは何かということの自己理解の試みである。ウェーバーは、近代の本質を「合理化」と見なし、西欧でのみ、合理化が体系的かつ徹底的に進められたのはなぜなのか、ということを説明するために、学者としての生涯を捧げた。デュルケムにとつても、近代社会を把握することが、社会学の目標だった。彼の近代社会観は、『社会分業論』（上・下、講談社学術文庫）や『自殺論』（中公文庫）によく出ている。特に、後者は、「自殺」という、一見私的な現象を手がかりにして、近代の本質に迫るものであり、また論証の手続きも周到で模範的である。

ここでは、近代社会の近代性へと直接に照準している研究のいくつかを紹介しておく。たとえば、エリアスの『文明化の過程』（法政大学出版局）は、タイトルが示す通り、文明化＝近代化がテーマである。ここで、エリアスは、とりわけ礼儀作法の様式に眼を着けて、文明化を跡付ける。真木悠介の『時間の比較社会学』（岩波現代文庫）は、時間意識の点から近代を探究する。これによると、われわれが暗黙の内に当然視している時間の了解（過去は不可逆に無化する、時間は無限である）は、自然性からの人間性の自立（疎外）と共同性からの個性性

の自立（疎外）の二つの点によって特徴づけられる近代の社会構造の産物である。

作田啓一の『個人主義の運命』（岩波書店）は、近代小説を素材にしながら、個人主義が生成し、変遷していく過程を叙述している。ここで理論的な背景となつていくのが、ルネ・ジラールの「欲望の三角形」の理論である。ジラールの欲望論や供儀論は、社会の生成機制を解明しようとするものであり、社会学の基礎理論としても興味深い。

佐藤俊樹の『近代・組織・資本主義』（ミネルヴァ書房）も優れた近代論である。前半では、特にアメリカ社会を対象とし、理論的にはウェーバーとフーコーの理論を援用しつつ、近代的な組織の生成を論ずる。後半は、日本的な近代の成立に関する歴史社会学である。ハーバーマスの『公共性の構造転換』（未来社）も、近代社会学と解釈することができる。これは、近代初期における「市民的公共性」の成立と、後期資本主義社会におけるその頹落を描く、思想的かつ社会史的な研究である（一の項目では論じなかったが、ハーバーマスのコミュニケーションの理論は、社会学の基礎理論としても、深い影響を与えた）。この項の最後に、富永茂樹の『理性の使用』（みすず書房）を挙げておこう。これは、近代

の起点としてのフランス革命を論じた、哲学的かつ歴史社会学的な研究である。「理性の使用」は、カントが「公共性」を特徴づけるときに使った言葉だ。

九 現代社会論・文化論

多くの社会学者は、近代そのものの中に、大きな断絶が孕まれている、と考えてきた。断絶後の社会は、「ポスト近代」「後期近代」「脱産業社会」「情報社会」等と呼ばれる。この項では、近代のこうした断絶を明確に意識した研究を、いくつか紹介する。

たとえばリオタールの『ポスト・モダンの条件』（水声社）は、ポスト近代を、「自由」や「解放」といった重い理念や価値を掲げる「大きな物語」が失墜した社会として描き出した。リオタールのこの本は、かなり哲学的なものだが、ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』（紀伊國屋書店）は、もつとずっと社会学的である。ここで、ボードリヤールは、近代の後期の様相を、モノが記号として現れる消費社会として分析する。内田隆三の『消費社会と権力』（岩波書店）も、このボードリヤールや、またフーコーの研究を受けつつ、消費社会における、権力・言説・資本の様態を分析している。ボードリヤールより、理論的にはるかに洗練されている。同じ

内田の『国土論』（筑摩書房）は、日本の近代の百年（二〇世紀）を、一連なりの時代として描く浩瀚な書物である。「天皇」や「高度成長」等の話題に関して、きわめて独創的な見解が示されている。

ポスト近代の様相を、より一層、具体的な現象に即して分析した書物として、宮台真司等の『サブカルチャー神話解体』（PARCO出版）がある。この書物は、「少女メディア」「音楽メディア」「青少年マンガメディア」「性的メディア」を対象として、戦後の日本社会で、コミュニケーションの様式の大きな変容があったことを実証しようとしている。井上俊の研究に、どの項で触れるか迷ったが、ここで一言、述べておこう。井上は、たいへん器用で、さまざまな現象を論じてきたが、とりわけ「遊」の領域を——彼はこれを「聖／俗」の対立との関連で位置づけている——を独自の社会学的対象として見出した研究は、後の研究に大きな影響を与えた。彼は、サブカルチャー的な現象を、社会学の本格的なテーマとした先駆者の一人に数えてよいだろう。

この文脈で、論壇で非常に話題になった、佐藤俊樹の『不平等社会日本』（中公新書）も紹介しておこう。この本は、日本の社会学者たちが協力して、十年に一度ずつ行っている社会階層に関する大規模な調査（一九九五年

の調査）をもとにして、現代日本で、社会階層間の移動が難くなりつつあり、不平等化が進捗している、ということを論証しようとした書物である。多くの反論も呼んだが、時代の雰囲気をよく捉えた書物でもあった。

最後に、ベックの『危険社会』（法政大学出版局）に触れておく。これは、「リスク」のあり方に着目して、近代の転換を描こうとした書物である。原著は二〇年近く前のものだが、9・11テロ以降、世界中でセキユリティへの意識が高まっていることを思うと、時代を先取りする研究だったと言える。

十 社会構想

社会学には、もともと、記述的な側面と規範的な側面がある。冷戦終結以降、とりわけ、規範的な指向性をもった社会構想論への要請が高まってきた。ここでは、特に「社会学」的な指向性の高いものに絞って、いくつかの社会構想論を紹介しておく。

ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』（未来社）は、コミュニケーションの基礎理論であると同時に、社会問題に対する批判的な基準を説明しようとした試みでもある。ここで、ハーバーマスは、メタ規範的な審級として、「合理的な討議」という概念を提起し

ている。それは、規範の妥当性に懐疑が生じたとき、一旦、その妥当性を宙吊りにして、規範を審問に付す場である。

社会契約論は、もともと、社会学の前史とも言うべき啓蒙期に提起されたものだが、現代の政治哲学者・社会思想家によって、洗練された形で復活している。特に有名なのは、ロールズの『正義論』（紀伊國屋書店）とノージックの『アナーキー・国家・ユートピア』（木鐸社）である。前者は、「無知のヴェール」を被った原初状況での契約によって、リベラルな正義の原理を正当化した試みである。後者は、まったく異なった仮定から、「最小国家」（夜警国家）が生成する様を描いた。これは、リバタリアンの聖典とも言うべきテキストでもある。

日本でも、北田暁大が、『責任と正義』（勁草書房）において、独特の社会契約論を通じて、リベリズムの（限定的な）正当性を論証しようとした。ここで、北田は、リベリズムが、どの程度法外な他者まで、その内

部に取り込むことが可能か、ということについての思考実験を行っている。同じような問題を、社会的選択理論等の数理社会学的な研究を踏まえながら考察した著作として、数土直紀の『理解できない他者と理解されない自己』（勁草書房）を挙げておきたい。また立岩真也の『私的所有論』（勁草書房）は、私的所有という場面にまで立ち返って、自由の根拠を徹底的に考察しようとする強靱な思考の産物である。私も、9・11テロという具体的な困難を受けて、やはり、自由ということを、その根拠の部分から建て直そうと試みた（『文明の内なる衝突』NHKブックス）。

大澤真幸 京都大学大学院人間・環境学研究科助教授

（比較社会学・社会システム論）

人文会会員の著書では『身体の比較社会学Ⅰ・Ⅱ』（勁草書房）『戦後の思想空間』（筑摩書房）『現実の向こう』（春秋社）最新刊に『思想のケミストリー』（紀伊國屋書店）などがある。

大学図書館がいま目指したいこと

利用者をめぐる最近の話題から

最近興味を覚えた大学関連の記事に、石田英敬先生の『「教養崩壊」の時代と大学の未来』（「世界」二〇〇二年一二月号）があります。教養の崩壊という文脈のなかで大学を分析した論考ですので、本稿とはややズレますが、そこで紹介されている実例がたいへん面白いのです。

ドストエフスキーを知らない文学研究科の院生、著名教官が漏らす嘆息、例えば「表象のクラスでもロラン・バルトを知っていたのは十名のうち、三名ぐらいだ」、「『失楽園』はおとうさんが読むエッチな本だという答えが返ってきました」などなど。ロラン・バルト著作集を刊行中のみずす書房や、ミルトン『失楽園』を発行した筑摩書房、さらには人文会の加盟出版社には同情せざるをえません。

同志社大学総合情報センター 井上真琴

実際、大学図書館でよく読まれる書物も様がわりしています。たまたま、インターネット上に駿河台大学での二〇〇四年度下半期の「貸出ベスト3」が紹介されているのを見つけました。第一位は金原ひとみ『蛇にピアス』、第二位は綿矢りさ『蹴りたい背中』、第三位は同『インストール』の順です。タイトルだけ見ていると、公共図書館とあまり大差ない印象とってよいでしょう。私の勤務する同志社大学図書館では、昨秋利用者の予約が殺到したタイトルがありました。複本購入をしないことには教育が立ちゆかぬ、とタイトルを調べ、発注しかけて手を止めました。それは新潮文庫の松本清張『黒革の手帖』でした。米倉涼子さんという美貌の女優が主演するTVドラマが評判で、その影響がモロにでたとの説明を同僚から聞きました。



レファレンス・カウンターでの相談風景（左前 著者）

高額すぎて学生には手が届かない？

さらに驚いたのは、貸出中の文庫本が返却されるまで相当な日数を要するにもかかわらず、何人もの利用者が予約していたことです。携帯電話の維持費がかなりの額にのぼるからでしょうか、消費生活のなかでの書籍購入費が年々減少傾向にあることは『学生の消費生活に関する実態調査』（全国大学生生活協同組合連合会）でも明らかです。

利用者からの「購入希望」申込みも多数あるのですが、「購入を希望する理由欄」に留意していると、「大学生には手の届かない、高額な『ちくま学芸文庫』を買ってください」とあります。

申込者はリクエストの常連であり、よく人文研究書を読み込んでいる優秀な学生です。ですが、いまの学生には、ちくま学芸文庫は高価すぎて買えないらしいのです。筑摩書房が過去の遺産を食いつぶすかのごとく（失礼！）文庫版で発行しても、こうした肌寒い現象が待っています。ちくま学芸文庫担当者は、どうお感じになるのでしょうか。

また「元版の単行本を図書館で所蔵しているので、是非利用してください」と薦めても、重くて持ち運びに不

便な単行本は嫌われものようです。しかし、ここに挙げた利用者は、実際に図書館に足を踏み入れてくれているので、たいそう見所のあるひとたちなのです。

図書館にこない学生たち

一方で、図書館を使わない学生に対する教員の嘆き節はいっこうに絶えません。朝日新聞をちぎってレポートに貼付した学生がいたので、「君、図書館でコピーしたものでよいのだよ」というと、「図書館に朝日新聞が置いてあるのですか!？」と真顔で驚くらしいのです。そんなこととはつゆ知らず、純情な真面目学生さんは、JRのキオスクで新聞を買ったそうです。図書館のPR不足も深刻ですが、実に悲しい話ではありませんか。

邪馬台国論争に関するレポート課題を与えたら、「インターネットを検索し、九州の邪馬台国老人クラブのブログをそのままコピー&ペーストで提出レポートにするんや……」と慨嘆する友人の教員もいます。

かように図書館に来ていない人も多いのです。典拠は不明ですが、千葉大学の図書館員によれば、大学生の図書館利用者は在籍学生の二〇〜三〇%に過ぎないらしいのです（JAERA MOOK 勉強のやり方がわかる。】）。

大学図書館の仕組み―娯楽読書から学術的な読解へ

図書館のPR不足は改善策を別途考えるところとして、せめて図書館に来てくれる利用者に対し、資料や施設を使いこなして勉強に役立ててもらいたい、と切なる感情を抱いてきました。そこへ筑摩書房から声をかけていただき、昨年『図書館に訊けー』（ちくま新書）を上梓しました。

この本では、実例を挙げながら、大学での勉強に図書館を利用することがどのような意味を持つのかを、丁寧に開陳したつもりです。単なる「図書館利用マニュアル」に矮小化することを避けようと、図書館をどう勉強に役立ててほしいかを解説しました。大学図書館は、日本のお寒い図書館事情のなかでも、まだ有利な展開が望める館種なので（国からの補助金や相互利用ネットワークの整備等）、せめて大学に在る間に図書館の有効な機能を覚えてほしいと念じて書いたのです。

幸いなことに、根本彰先生には「図書館が単なる資料の寄せ集めではなく、そこにそれをうまく使いこなして知に転換するための様々な仕組みが埋め込まれていることが理解できる」本と評していただきました。

そうなのです。大学図書館の利用の仕方として大事なものは、「調べ、書く」ための仕組みを活用することです。

この点について、ちょっと例を挙げて考えてみましょう。
さきに、駿河台大学図書館の二〇〇四年度下半期貸出第一位が、金原ひとみ『蛇にピアス』（集英社）である
と紹介しました。これを楽ししく読んだ、ということと終
わるならば、大学図書館も公共図書館もなら変わりは
ありません。しかしながら、大学ではもう少し違う読み
方、使い方が必要になるはずです。

『蛇にピアス』を読んで破綻の美学をもった小説だっ
たというだけでは、単なる読書感想文に終わります。大
学という教育研究の場で、論評を加えたレポートを作成
しようとするならば、何らかの分析や加工をして、学術
（つばい）ものにしなければならぬでしょう？

ご存知の方もおられると思いますが、この作品は、芥
川賞を受賞して「文藝春秋」に掲載された内容と、集英
社からだされた単行本では、本文の中身が異なっている
部分が存在します。この二つを比べると、同じ作品であ
りながら、かたや作文、かたや小説といえるくらい、が
らりと解釈と印象が変わるといいます（青山南「大丈
夫？」「本の雑誌」二〇〇四年四月号）。

作品の生成過程を分析したいと思えば、まず『蛇にピ
アス』の本文を、雑誌と単行本をつき合わせて異同を細
かくみていく必要があるでしょう。そして、作品にどの

ような書評や論評記事が存在するのかを調べて、総合的
に分析しなければなりません。

そうするには、国立国会図書館編集『雑誌記事索引』
や『大宅壮一文庫雑誌記事索引検索Web版』、また朝
日新聞や讀賣新聞の新聞記事データベースを検索し、文
芸時評や関連文献に目を通すことが避けられないはずで
す。調べるためのツールを用いて、先行する論評や研究
論文を探索する。それらを読み込んで咀嚼したうえで、
誰がどこでどう論じているかを典拠を示して引用し、新
たな分析を加える。これが学術の第一歩であるはずだと
私は考えています。

こうした調査が可能なように資料の蓄積を営々と行い、
資料群にアプローチしやすい仕組みを提供して、勉強へ
と誘導していくのが大学図書館の機能と言つてよいでし
ょう。つまり、「調べ、書く」ための仕組みと機能を提
供することに主眼をおくのが大学図書館なのです。

図書館は情報を知に転換するシステム

以上のようにみると、図書館は単なる資料や情報の集
積「庫」ではなく、利用者を次から次へと新しい認識へ
と導き、新たな知的生産を後押しする集積「回路」であ
るといえないでしょうか。

ところが、かくも当たり前のことを理解できない面々が多いのです。例えば、私どもの大学でも「君、一般家庭では新聞って一種類しか契約しないのが普通じゃない。なぜ新聞データベースを朝日新聞や日経新聞ら全国紙すべてに契約するの？ おかしいじゃない」と噴飯ものの意見を語る管理職がいます。「図書館はものごとを多角的に調べ、比較対照できるように資料を集めて提供しているのです。同じ事件でも、新聞の思想的立場が違えば記事内容も相当変わります。その比較分析のために必要なのです。それに同志社には新聞学専攻（現・社会学部メディア学科）があるので、全部揃えることは当然です」と反論することになります。

こうした会話が今後起きないように、せめて図書館員としては利用者に図書館の本質を理解してもらい、資料や情報を学術的に活用する方法を「伝道」していきたいのです。

研究偏重から教育・学習支援へのシフト

つい数年前までの大学図書館界を見ていると、議論の焦点があまりにも電子ジャーナル問題に集中し、教員の研究支援に偏重しているくらいがありました。研究支援は大切な要素であることは否定しませんが、これまで学

生の学習支援や教育支援は、あまりにも等閑視されてきたというほかありません。

実際には帰国子女の学生でもない限り、学部学生が電子ジャーナルの学術論文をガツガツ読みこなし、自論を展開していることは、少なくとも同志社大学では稀です。現実に教育を受けている学生は、本稿の冒頭で述べた状況にあります。同志社大学の学生水準が低級だと言われるならそれまでですが、他大学ではどうでしょうか。

日本語で書かれた研究書や学術論文が読みこなせないまま（これが人文書の売れない原因のひとつであることをお忘れなく）、大学図書館で欧米の電子ジャーナル導入の議論に時間を多く割かれることは空しいのです。裏返せば、大学図書館というところが、教員の「研究」の美名のもとに夥しい金を使いながら、いかに教育や学習の視点に立った運営を置き去りにしてきたかを照射しているともいえるでしょう。

同志社大学の図書館では、原則教員用の研究資料は購入を控え、学生用図書の購入に限る予算配分（約二億円弱）となっています。各部局では、それぞれ教員研究用の資料を購入しますが、図書館では教員が購入希望をだしてきても、それが学生に読ませたい「推薦図書」ではなく、自らの研究に使う資料であれば、当然購入は却下

させてもらいます。

つまり、図書館で購入する本は、図書館の職員が選択しており、学生利用者の必要とする学習用図書の購入が保証されているわけです。

図書館職員主体で運営を行いますので、データベース類も職員で検討して契約しますし、高額図書も視聴覚資料も独自に判断して購入します。研究用高額資料に予算を食われている国立大学法人と比較すると、同志社大学の学部学生は幸せな環境の中で図書館を利用できているといえるでしょう。

導入教育と情報リテラシー能力

ようやく最近になって、大学の図書館は「研究」中心の運営に偏重しており、教育カリキュラムとの結びつきが希薄で、学習・教育の支援が疎かであったとの反省がでてきました。

そこへ、大学生の学力低下論議も含めて、高校から大学へのスムーズな学習の移行を支援する「導入教育」や「初年次教育」の重要性が声高に叫ばれるようになってきました。これが、図書館にとって追い風となっています。

科学高等教育研究所「効果的導入カリキュラムの開発」(山田礼子代表)によれば、「導入教育」は、(一)補習

教育、(二)スタディ・スキルの教育、(三)ステューデント・スキルの教育、(四)専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育、のカテゴリーに分けられます。そして、このなかの(二)のスタディ・スキルに図書館が大きな役割を果たすとの注目を浴びています。

大学教員側から「私の基礎演習や講義の時間を割くから、図書館の利用方法や情報探索の方法を教えてやってほしい」との申し入れが図書館に舞い込んでくるようになったのです。つまり、「導入教育」に協力して、文献や情報を使いこなす情報リテラシーの方法を、図書館が教える機会が登場したわけです。ひと昔前に比べればたいへんな様変わりです。

情報リテラシーの基本をいえば、①さまざまな媒体を通して資料や情報を手する、②集めた材料をもとに自分のテーマを決める、③テーマに関連する先行研究の蓄積に目を通す、④トピックを切り出して絞り込む、⑤価値ありと判断した基本文献をもとに、分析しながら読み解いていく、⑥自分の構想を練り上げ、最終的な成果物としてアウトプットする、というプロセスを体得することでしょう。

このプロセスで、図書館をどのように使い切るかを、スキル面について教えていくのです。どの学問分野であ

れ、このプロセスを身につけることは大切です。電子ジャーナルとかデータベースに代表される電子化資料も、こうしたプロセスのなかで採られる選択肢のひとつに過ぎないのです。

ややもすれば、情報リテラシー教育を、コンピュータソフトを操作するコンピュータ・リテラシー教育に矮小化する傾向がありますが、IT先進国である米国の大学ではそのような捉え方をしていません。

いま大学図書館の目指す目標のひとつは、学習支援や教育支援の立場にたつて、資料や情報を利用する方法の「伝習所」となることなのです。文献や情報との出会い方を利用者に演出し、探索の膠着状態に突破口を示し、利用者を迷走状態から救い出す。情報を「消費」することから「消化」することへ変え、知的生産を行いやすい環境づくりを整備する。これが大学図書館に課された使命である、私は確信しています。

レファレンス・サービスと情報探索講習会の充実

こうした動きのなかで、私たちが力を入れているのは二つのサービスです。

一つは、レファレンス・サービスの充実、もうひとつは、段階的なレベルを設けた情報探索講習会の企画です。

レファレンス・サービスとは、利用者の探索の相談にのり、「調べもの」をサポートするサービスですが、皆さんはご存知でしょうか。

先日読んだ村上春樹・佐々木マキ『ふしぎな図書館』（講談社）を挙げて、どのようなものを具体的に説明してみましよう。この物語では、主人公の「僕」が市立図書館にいつて、次のような質問を図書館の老人に投げかけるのです。

「オスマントルコ帝国の税金のあつめ方について知りたいんです」と僕は言った。（中略）なにかわからないことがあつたら、すぐに図書館に行つて調べられるようにと、小さいころからしつけられてきたのだ。

実に心がけのよい主人公（笑）ですが、こうした質問に回答するのが、図書館のレファレンス・サービスです。私なら、この質問に対してカウンターでこう相談にのるかもしれません。

「まず、オスマン帝国の概要については理解できていますか。『世界大百科事典』（平凡社）などで基礎事項の確認は済んでいますか」「総括的なまとめをみたいのなら、いわゆる講座もの、例えば『岩波講座世界歴史』の

論文や別巻の総目次・文献索引から研究のおさらいを始めてはどうですか」「史学雑誌」各年五月の回顧と展望号で、必ずイスラム研究のレヴュー特集が組まれており、参照すると便利です」

「そうですか、徴税請負人制度が研究対象ですか。かなり絞れてきましたね。では、データベースで検索してみます。あつ、リンダ・T・ダーリング著『歳入の増加と支配の正当性——オスマン帝国における徴税・財務制度(1560—1660)』や永田雄三「後期オスマン帝国の徴税請負制に関する若干の考察」(『駿台史学』100)などがありますね。オスマン朝も時期によって制度が変遷しますから、全体像を知るためオスマン帝国の通史もざっと目を通すことが必要ですね」「『日本中東学会年報』や東洋文庫発行の「東洋学報」に関連論文があるようです。東洋文庫の方で関連する文献目録を発行していないですかね。最近のものなら、インターネットで公開されている日本中東学会・中東研究文献データベースを検索するといいでしょう」

という具合に、インターネットしながら、徐々に探索の支援を深めていきます。こうしたレファレンス・サービスは、まだまだ利用者に認知されていないのですが、いったんこのサービスを楽しめると、利用者はリピータ

ーとなってやってきました。それも、以前よりも数段階高次の探索レベルの問題を抱えて、また訊ねてくれるのです。

同志社大学図書館での相談件数は、昨年度約二万三千件でしたが、利用者は調査のモチベーションを持っていますので、少し相談にのつてあげるだけで、みるみる探索技術を向上させていきます。

二つ目の情報探索講習会は、百科事典の使い方、法律情報の探し方、外国文献の探し方など多彩なプログラムを企画します。情報リテラシー能力を涵養するプログラムを図書館で企画し、利用者に伝えていくわけです。そのうち一部は先に述べた、教員からの依頼により授業に出向き行うもので、講習会は年百回以上開催しています。そこでは単に印刷物がデータベースかといった利用方法にとどまることなく、総合的な探索技術を説明します。例えば新聞ひとつとっても、著作権に絡んでデータベース化されない署名記事、本社版と地方版の記事掲載日のズレ、本文の「関係筋」などの用語が示す意味も解説しています。

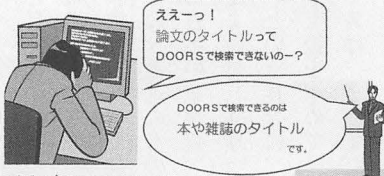
今後はインターネット情報源そのものの評価と利用方法に焦点をあてた講習会が必要です。既に米国では、インターネットの情報源まで評価する講習会をずいぶん以

前から始めています。

本当に重要なのはテキストの読み込み

以上のように、図書館は学生利用者の情報リテラシー能力の向上を目指して努力を重ねています。しかし、図書館の使い方がわかったから、情報探索技術が身についたから、またインターネットなど電子情報源の利用スキルが上達したからといって、学術の世界や学問がわかるわけではありません。残念ながら、図書館がアシストできるのは、資料や情報の収集までなのです。

やはり学問の基礎になるのは、テキストそのものの読



**30分でわかる
論文の探し方講座**

いつ? 6月1日から6月30日までの
① 10時45分～11時15分
② 12時30分～13時
③ 15時～15時30分
(ただし、土曜日、日曜日はお休み)

定員は各回 25名です

どこで? ラーネード記念図書館2階 セミナールーム
もうしこみ ラーネード記念図書館2階 メインカウンター

データベース(CINii/MAGAZINEPLUS)の使い方、検索結果の見方から文献を入手するまでを説明します。

情報サービス課(栗田辺)

情報探索講習会のチラシ

解能力であることは疑いありません。このことは、日米の大学教育の違いをみれば明らかですし、その違いが図書館利用にも影響しているのです。

五年前のことになりましたが、ハーバード大学に研究滞在をされた橋爪大三郎先生が、興味深い記事を載せておられました(「アメリカの大学と情報教育」ハーバード大学見たまま記)。「本とコンピュータ」二〇〇〇年春号)。

情報教育は、コンピュータにさわってソフトが動かせるようになるのとは別に、情報とは何かという原理を体得するのではありません。基本的には、本をどう読むかという態度の問題に帰着する。(中略)「ハーバード大学では」蔵書は一三〇〇万冊にもものぼる。古典を読むことが学問の基本であると理解しているから、ここまで図書館を大切にするのである。

そして、①コンピュータを道具と割り切って使いこなすように指導している、②情報化に過大な幻想を抱かず、学問とは本(それも古典)を読むことだという軸足がおれていない、③教室での討論(オフラインのコミュニケーション

ーション)をもっとも重視しており、これらが大学教育の命脈を保っている根本であると報告しておられます。私も同時期、海外研修でハーバード・イェールなど、米国有力大学図書館を三ヶ月にわたって視察していたこともあり、まったく同感です。さらに、次のように言及されます。

アメリカの大学の情報教育は、それ以前の伝統的なトレーニング・システム(どのように図書館を利用し、本を読むか)にうまく接続するかたちで展開している。(中略)本を読む。よく読む。徹底的に読みこなす。——情報化とは無関係な、古典的なやり方に見えるだろうが、この訓練なしに、情報化に立ち向かうのは無謀だと言いたい。

要するに、文献や資料を読み込んでいることを前提に教室での討論に参加しなければならないし、議論するには証拠や典拠を示すことが必須です。そして、典拠となるものが、印刷本か電子本かなど関係はないのです。

「文字に書かれた情報をどんなふうに使ひこなしていくのか」がポイントであると、菅谷明子先生もこの「人文会ニュース」の九十四号で言われていました。図書館

の探索法をつかって資料・情報を探して文献を見つけ、それでこと足れり、ではないのです。探す能力と、本文を読み解き、読み抜く能力はまた別であるからです。

ところで、利用者と接して日ごろ感じる懸念と教員から耳にする危惧は、勉学をしていく途上で「わからない」ことに出会ったときの学生の態度です。

先日テレビ番組で哲学の驚田清一先生が仰っていました、何か分からないことや理解できないことに直面した際、「わからないものを自分のなかにいったん置いておいて、あとで『ああこういうことだったのか——』と発見していく能力が、知性である」はずなのです。

(NHK・BS2 週刊ブックレビュー 二〇〇四年十一月二十七日放送)。

しかし、これが今の学生にさっぱりできないと、特に教員がしみじみと言うのです。わからなければすぐ頭のなかから捨ててしまい、興味を切断してしまふ——。

断片化された情報のつなぎ合わせ、パッチワークに慣れてしまい、じっくりと読み込むことができなくなっていることが原因のようです。これができないとなると、人文研究書など読めたものではないのでしょうか。

人文会への期待 ―読者を育てる工夫―

人文書が読み継がれるには工夫が必要です。昔は読書の力を磨くにも階梯がありました。岩波書店の場合であれば、まず新書を読んで、その次に岩波全書へ進み、岩波選書や単行本へ挑戦する、といった道筋です。

いまでは、こういう道筋で読むのか、また入っていくのかというマッピングが必要なのかもしれません。そのマッピングを自分で行うのが昔は楽しみであつたのですが、いまの学生諸君には無理があるようです。だからこそ、教員はシラバスに多くの文献を挙げて誘導しようとするのですが、あまり効果はないようです。

出版社側の方は、いかがでしょうか。『人文科学の現在』や『人文書のすすめ』(Ⅰ―Ⅲ)の発行など、人文会の努力は知っていますが、内容的に筋がまとまったものではなく、識者の持論の寄せ集めに過ぎないこともあつたのではないのでしょうか。

それに、出版広告やパンフレットも冴えないようです。昔はパンフレットをみて、その学術分野や学術世界の鳥瞰図が得られるということが少なくありませんでした。

例えば『岩波講座現代工学の基礎』のパンフレットを開けば工学の体系が一目瞭然であつたし、どの順に勉強

すればよいかわかりました。また、筑摩書房の『本居宣長全集』のパンフレットでは、吉川幸次郎の数万字の推薦文を読むだけで、宣長の訓読方法の本質を知り、何故『古事記』の注釈書が、同じ岩波書店の『古典文学大系』シリーズと『日本思想大系』シリーズの両方で刊行されているのかを理解することができました。

こうした段階的なステップを考えた出版物の刊行やマッピングの工夫を再考してもらえば、読者層を広げ育てることに繋がるのではないのでしょうか。

最後に、松浦寿輝先生の次のことばを人文会へのエールとして送りたいと思います。

一つ強調しておきたいのは、人文科学研究の領域での優れた仕事に必須なのは(その水準と質を保障するのは)「学識」以外にないというあまりに基本的な事柄です。「学識」は「情報」ではない。インターネットの検索ツールで取ってきたものをコピーアンドペーストで貼り付けたものは単なる「情報」にすぎず、論文にとつての本当の核をなし支柱をなす「学識」ではない。「学識」は、古臭いようですが、また迂遠なようですが、書物と向かい合い、ものを考え营々とメモをとりながら過ごす長い長い時間の

中では身体化されえない「知」のことです。

（「ユリイカ」二〇〇四年三月号）

まことに膝を打つ表現です。情報を集めてそれを「よく編み」「新しい言説」へと導くことができるのは、価値ある作品を読んで培った学識であって、単なる資料や情報の寄せ集めではないのです。その意味では、「調べもの」が得意だというのは、探す「技法」と「学識」の両方が備わってはじめて完結することだと言えるでしょう。

う。

人文会加盟の出版社には、今後とも学識を磨くための価値ある作品を世に送り出してもらうことを期待してやみません。さらには、現場の教育方法と連携して、それらの電子化と配信のバリエーションを視野におさめた出版活動をお願いしたいと思います。大学図書館はそれらを使い、読みこなせる読者を育むための努力を惜しみませんので、お互いによい協力関係を築いていこうではありませんか。

出版業界の構造変化と書店間競争

この十年間に起きた大手銀行や保険会社の破綻は、それまで不変だと信じていた社会システムが、実は意外と簡単に変わってしまうことを我々に見せつけてきたが、出版業界においても、取次システム、委託扱い、再販制度など、絶対だと思われてきた仕組みに変化の兆しが見え始めた時期であった。

私がこの業界に入ったのは消費税導入が話題となっていた一九八九年であったが、一九九〇年代から今世紀にかけての変化には目を見張るものがある。

一九九一年には「政府規制等と競争政策に関する研究会」が最初の報告書を出し、十年間にわたる再販論議が始まり、現在のポイント問題にまで及んでいる。そして、デジタル化の進行は、編集製作から販売現場までを大きく変え、出版市場の成熟化が産業構造の変革を迫り、書店業界では巨大店舗の増加から一転して書店の減少、そ

して今再び新たな出店競争が進行している。

西暦の区切りに過ぎない世紀末に特別な意味を持たせようとは思わないが、変化というものは順番に訪れるのではなく、さまざまな事象が一斉に押し寄せるものだという感慨すら抱かせる。

この間の出版業界の変化は、太平洋戦争敗戦後としては最も大きく、また本質的な変化であると考えられる。特に日本の出版流通を担っている取次の変化に、その思いをさらに強くさせられる。それは書店にどのような影響を与えるのか、そして書店自体はどのように変わろうとしているのかを、日常の取材活動の中から考えてみたい。

戦後初、取次システムの根本的な変化

出版業界、そして書店の今後を考える上で、現在進行

星野 渉

中の取次会社の変化を無視することは出来ない。物流、決済、情報、金融といった流通にとって必要とされる全ての要素を提供する取次システムは、日本の出版流通そのものと言っても過言ではないからだ。

特に海外の出版業界を取材していると、日本では取次システムが出版社、書店に大変多様な機能を提供し、出版社、書店がそれに深く依存していることを痛感する。言い方を変えれば、出版流通の世界で様々な変化が起きたとしても、取次システムそのものを変えられるものでなければ、本質的な変化にはなりにくいということである。

その意味で、ここ数年のトーハンと日本出版販売（日販）の大手取次二社が進めている変革は、これまでの取次システムの考え方を根底から覆すものであり、極めて大きな意味を持っている。

その変化をひと言で表すと、[〃]撤く流通から届ける流通へ[〃]と表現することが出来る。太平洋戦争中の統制会社・日本出版配給株式会社（日配）以来続いてきた配給型の流通システムを、消費者個々の要求に対応する仕組みに変えようとしているのだ。

例えば、トーハンが進めている桶川計画では、流通している書籍のほとんどを在庫して、市場の要求に迅速に応える「QRセンター」を開設する。これは従来の日本

の取次にはなかった発想である。

取次はこれまで在庫を持たないことによって、低コストの流通を実現してきた。一時的に在庫を持つにしても、トーハン、日販ともにせいぜい一〇万点と、流通書籍七〇万点には遠く及ばなかった。しかも、それらの在庫は回転率の良い売れ筋商品が中心で、基本的には絶えず商品が動いているフローの流通だったのだ。

これに対し「QRセンター」は、在庫を持って、書店からの注文に対応する仕組みである。すなわち、ローコストのばらまき型の流通から、素早く確実に商品を提供する物流体制に切り替えようとしているのである。

そのスタイルは、欧米に見られる書籍ホールセラーと同様の機能である。しかし、こうした欧米のホールセラーは正確さと速度を売りにしているが、流通マージンは日本の取次マージンを上回る一〇数%が一般的で、しかもほとんどの国で日本より書籍の価格が高い。「QRセンター」は現在のローコスト体質のまま、こうしたホールセラーの機能を發揮するために、出版社の出資を仰ぎ新会社を設立し、在庫の一部を出版社の社外在庫とするなどの方法でコストを抑える工夫をしようとしている。

一方日販は、出版社や倉庫会社の在庫をリアルタイムで把握することによって、流通の品質を向上させようと

試みている。日販をはじめとした取次五社で立ち上げた返品処理会社・出版共同流通の専務で日販取締役の高見吉弘氏は、書籍返品品の自動処理を開始するのに伴い、在庫の単品管理やオンライン化といったシステム化が出来ていない倉庫会社との取引は、今後見直すと宣言している。これは日販が単に返品処理の自動化だけを目指しているのではなく、今よりも精度の高い書籍流通の整備を目指していることを表している。

出版不況といわれ、これから先も日本の書籍市場がそれほど拡大するとは思えない中で、これだけ書籍流通に投資する理由は、彼等が市場の変化をこれまでにない本質的な動きだと感じ、それに対応して企業を存続させようとしているからだ。

これまで取次は、書籍、雑誌の両方を扱い、物流に限らない様々なサービスを出版社、書店に提供するという、他国で見られない総合的な機能を担うことで、出版流通のチャンネルリーダーの地位を維持してきた。しかし、インターネットによって情報流通が劇的に拡大、高速化している時代には、従来型の流通では対応できない。今後書籍流通の担い手として存続していくために、多品種少量で高品質な物流に対応することが必要になるのである。

自律的ビジネスの必要性

取次の流通改革は、注文品流通の精度を向上させ、これまでよりも正確な配本を実現するであろう。その意味で取引書店にとって、歓迎すべき流れだと言える。しかし、書店が自律的に商売を行おうとした場合、取次のシステムに依存しきつても良いのかという問題が残る。

書店のマージンが低いとか、売れ筋商品が希望通りの数入ってこないといったこれまで繰り返されてきた書店の不満の多くは、主に書店が商品供給などの面で、ほとんどを取次に依存してきたことに原因がある。

ここ四年ほど、毎年米国の独立系書店や書店組合の関係者取材する機会を持っているが、彼等の話から感じるのは、日本と米国で書店の仕事内容や基本構造にそれほど大きな相違点があるわけではないが、ただ米国の書店が「仕入れている（買っている）」ことと「値付けしている」という二点だけが決定的に違うということである。

競争は日本以上に厳しく、政府の支援もない中で、米国の独立系書店はこの一〇年間で半減しているが、それでも大手書店チェーンやAmazon.comとの競争に勝ち残り、しっかりとビジネスを継続しているユニークな書

店が数多く存在することは、日本でもよく紹介される。取次ルートが書籍流通の二割に過ぎない中での買切取引は、発注や口座管理の煩雑などを伴うが、少なくとも自分が選ばない本は入荷しないし、書店のマージンは四〇～五〇％確保されている。

自分で商品を仕入れ、値付けをするというのは、商売の最も基本的な要素であり、これらを放棄して自律的なビジネスはあり得ないのだと思う。米国と日本では取引制度や価格決定制度に違いがあるとはいえ、書店が取次と対等な関係でつき合う自律的な存在にならなければ、日本の書店業界の将来は暗い。そして、現在の書店競争の中では、そのように自律的な書店しか生き残っていないとも言えるであろう。

新たな競争に入った書店界

次に書店間の競争がどのように推移しているのかを見てみると、ここ数年の出店・閉店のデータから、書店の競争が新たに段階に突入していることがわかる。

書店調査会社アルメディアによると、出店による売り場面積の増床規模は九〇年代後半から減少し始めたが、二〇〇一年を境に増加に転じ、閉店による減床もやはりこの年をピークに、その後は僅かではあるが減り始めて

いる。

このことから、九〇年代後半に経営不振による廃業や不採算店の撤退が盛んになったが、二〇〇二年からは、撤退をほぼ完了したチェーン書店が積極的な出店に転じたと見ることが出来る。

さらに大手スーパーが積極的に建設している大型ショッピングセンター（SC）が、集客の目玉のひとつとして書店を誘致する動きがこの傾向に拍車を掛けている。SCにとって書店は、老若男女を問わず、仕事、生活、趣味指向などあらゆる領域を網羅し、SCが必要とする幅広い年齢・性別の消費者を集客する絶好の商材である出版物を扱っているため、必須のテナントとなっている。そして、札幌、福岡、東京駅周辺、新宿といった例をわざわざ挙げるまでもなく、最近の出店競争には、これまでの秩序が通用しない。昨年一〇月、紀伊國屋書店の聖域のようになっていた新宿駅東口へ、創業から二〇年余のジュンク堂書店が出店したという、まさに象徴的な出来事も起きた。

集客の見込める場所には、他の書店があっても強引とも思える出店をする。まさに大手書店同士の取るか取られるかのマッチレースが始まっている。出版物の販売量が増えない中でシェア争いは、好況時代の出店競争よ

りも激しく、お互いへの遠慮や配慮はみえなくなっている。

その一方、各地で日本書店商業組合連合会の幹部を務めたような地域一番店、老舗書店が姿を消している。書店組合の組合員数は今年六月時点で七千軒を切ったといわれ、書店間競争が「調整」の時代から、「戦い」の時代に転換したことを印象づけている。

書店の新パッケージ展開

こうした大型書店同士の競争は、これまで以上に「店舗の大型化」、「商品の複合化」、「集客力の強化」を加速させ、同時に人件費などの「コスト抑制」を進めさせている。

丸善は六月に発表した新中期事業計画で、今後五年の間に六七〇〇坪の出店を行うことを明らかにし、それに伴って社員一人が担当する売り場面積を現在の一・六倍に拡大するという。また、愛媛を本拠に展開している明屋書店は、最近、新規出店よりも一五〇坪クラスの既存店を三〇〇〜五〇〇坪に増・改築することに力を入れている。

そして、店舗の大型化に合わせるように、商材と提供方法を拡大する書店が増えている。広島県を中心に四〇

店を展開しているフタバ図書は、五〇〇〜一〇〇〇坪の店舗に書籍、雑誌、CD、DVD、ゲームセンター、インターネットカフェ、リサイクルショップまでを含んだ複合店GIGAの展開を、広島と福岡県内で進めている。さらに貸与権の権利処理システムが稼働したことから、今後はコミックレンタルを導入するチェーン書店も増えて来るであろう。

また、かつて米国の大型書店を参考にして導入が進んだ児童書などで構成する「キッズコーナー」は、家族層の集客という目的に向けて、さらに進化している。大阪の喜久屋書店では専門の人材を育成し、児童書と知育玩具で構成した「子ども館」というコンセプトショップの展開を、各店舗で開始している。

このように、店舗の大型化に合わせ、集客を図るための新たなパッケージを模索する動きが広がっているのである。チェーン書店による新たなパッケージ開発と積極的な出店によって、書店地図はこれからも流動化していくと考えられる。

中小書店の生き残り策「Net21」

一方、大型チェーンの競争の影で、中小書店の閉店は今でも高水準で続いている。こうした書店の多くは地域

に密着した書店であり、このタイプの書店が減少することとは、子供や専業主婦といった消費者が出版物に接触する機会を減らすという意味で、出版産業全体に関わる問題である。

中小の地域書店は取次への依存度が高い上に、出版社から見ると個々の店は販売の絶対量が少ないため視界に入りにくい。出版社の報奨政策が個店へのスリッパ報奨から法人対応に変化する中で、小規模書店はますます存在感を示しにくくなっている。

こうした書店が自律的なビジネスを行うためには、やはり単店では難しくなっている。何らかの形で協力し合う集合体を形成する必要があるが、これまで以上に高まっている。

そうした試みの中で、今最も成果を上げているのは「有限会社Net21」の取り組みであろう。参加している十八法人、五十一店舗の中には、もし単独であれば出版社の法人対応からは漏れ、取次にとっても小規模店として扱われる店が多いが、共同出資で有限会社を設立することで、今では大手出版社の販売ランクで三十位前後に入っている。

各書店の経営者が「有限会社Net21」に出資し、役員になると同時に、それぞれが担当する出版社を持つて

仕入れや販促費の交渉する。毎月開く例会では、促進商品を選定するなど実務的な議論を交わし、POSデータを完全に共有することによって、個店では見つけにくい売れ筋を発見し、商品確保するなど、単店では出来ない活動を展開している。

さらに栗田出版販売にNet21の一括仕入れ口座を開設している。取次に依存するのではなくて、取次の機能を自分たちの自律的なビジネスに利用するという、これまでの中小書店では考えにくかった発想を現実のものとしているのだ。

こうした彼等が目指しているのは規模の拡大ではない。地域で必要とされる存在であり続けることであり、地域の独立系書店として経営を継続していくことなのである。

いま問われる書店組合の活動

もちろん、Net21のような活動が簡単にできるわけではない。彼等は入会時には財務諸表を提出し、各店の経営が健全であることをお互いに確認してから活動を開始している。そして組織を法人化することで、外部の信用を勝ち取ったのである。あらゆる書店が選択できる手段だとは言えないだろう。

むしろ、中小書店のこうした連携は、本来、書店組合が担うべき役割だと思う。このような時代だからこそ、書店組合が中小書店をより実務面でサポートし、大手書店との競争に耐え、取次と対等な自律的な書店たらしめる活動が求められている。

ここで再び米国の例を紹介したい。

アメリカン・ブックセラーズ・アソシエーション（ABA）は九〇年代前半に五〇〇〇軒だった会員数が、世界最大のチェーン書店・バーンズ＆ノーブルやAmazon.com など手強い相手との競争で、現在は一七〇〇軒に減少している。しかし、その活動内容は、大手書店へ有利な正味を与える大手出版社を独占禁止法違反で訴えるなど、積極果敢である。

ABAでは専門会社に依頼して市場調査を行っており、消費者がベストセラーリストから本を購入する傾向があると知ると、会員書店のPOSデータを集計した独自のベストセラーリストを作って配布したり、消費者が低価格志向にあると知ると、リメイnderや古書の取り扱いに関するセミナーを開く。また、大手書店のギフトカード（日本の図書カードに近い）がよく使われているとなれば、組合独自のカードシステムを開発し、組合員だけで使えるギフトカードを作る。

そうした活動は、消費者に対して組合員書店がどのようなサービスを行えるのかという視点で組み立てられている。他者に依存するのではなく、自分たちが自律的に生き残るための活動なのだ。そのことは、書店組合を構成する中核が「インデペンデント（独立系）」書店であるという自負でもあるという。

そしてこのような活動を支える年間八〇〇万ドルの予算のうち、会費収入は四分の一程度で、残りはブックフェア（BEA）の開催権をリード・エグジビション社に販売した資金や、契約で毎年入ってくるBEAの売上金の一部、そして様々なマーケティングプログラムへの出版社の協賛金などで賄われている。

日本書店商業組合連合会の構成員は、かつての半数に減ってしまった。しかし、それでもなお米国の倍以上の組合員を抱えている。中小書店であっても、やる気になればNet 21のような活動はできるのであり、日本の独立系書店がこれからも努力していけるためにも、是非ともこれまでに以上に積極的に前向きな活動を期待したい。

価格競争の予感

最後にこれから書店業界でも予想される価格競争について触れたい。

ご存じの通り、出版物には再販売価格維持が認められているため、ほとんどの出版物には再販契約の対象であることを示す「定価」が表示され、書店での価格設定は出来ない。しかし、それは必ずしも全ての価格競争を制限しているわけではない。

既にオンライン書店間では、送料を無料にするという形で事実上、価格面でのサービスが始まっている。「ベスト・プライスの提供」を標榜するAmazonは、再販制度のあるドイツと日本では送料を無料にすることでそれを実現すると表明し、日本では同社が始めた一五〇〇円以上の購入者に送料を無料にするというスタイルが、オンライン書店の標準的なサービスとなっている。

そして今後はポイントサービスという形の価格競争も予想される。

公正取引委員会は昨年六月、書店組合や取次会社が書店のポイントサービスを止めさせようとすることは独占禁止法に違反する「共同行為」や「優越的な地位の濫用」に当たるとし、例え取次を通じて書店と再販契約を結んでいる個々の出版社であっても、低率（一〜二程度か）のポイントまで止めさせるのは許されないという見解を示した。

これは公取委が再販制度存置の条件として業界に求め

た「再販弾力運用」、すなわち小売段階での価格の弾力を改めて求めたものであり、今年六月までに業界側はこの指導を受け入れた。

さらに、公取委は今年七月で期限を迎えた書店での景品規制（出版物小売業公正競争規約）見直し問題で、景品提供の通年実施を認めない期間制限条項は、継続的なポイントサービスを阻害するとの考えを明らかにした。期間制限条項が撤廃されれば、値引きではなく景品という名目で、現行規制なら購入価額の七％までサービスを実施することが出来るようになる。

こうした動きにいち早く反応したのもAmazon.co.ukだった。書店組合によるポイント反対運動の方針に変化が現れたという業界紙報道の直後に、一万円以上の購入者に五〇〇円のギフト券を提供するサービスを開始。ほぼ同時に、やはり公取委が定価販売を認めないとして指導した「複合出版物」（出版物とCD・ROM、DVD、フィギュアなどを合わせた商品）の値引き販売も開始した。

さらに同社と競争している他社も、ポイントサービスを実施しようとする動きがある。楽天ブックスの杉原章郎社長は今春、業界紙のインタビュで楽天市場の顧客が他の商材購入で溜めたポイントで出版物を購入できる

ようにしたいと述べ、そうすればポイントによって「月間二―三億円」の書籍販売が見込めると表明した。

こうしたオンライン書店によるポイント競争は、恐らく書籍市場全体に一定の影響を及ぼすであろう。隣の韓国ではオンライン書店が書籍の値引き販売を行ったことで、シェアが書籍市場の一五％に達しているという。場所を問わずに購入できるインターネットの利点は、価格競争によって最も際だつからだ。

一般の書店の中にもポイントサービスを実施している例はあるが、消費者の低価格志向が強くなるなかで、今後、業界でルール化されたレンタルコミックや、自由価

格本（リメイナダー）の販売などに力を入れるところも出てくるだろう。

公取委はさらなる再販制度の弾力運用を求めている。そして、それを現実の競争手段として利用する小売店が出てくる以上、もはや書店にとって価格競争すら他人事ではなくなろうとしている。

書店にとっての競争はますます多様化する。そういう動きを注意深く見つめ、読者、消費者が自分の店に求めているものを見極め、どのようなサービスを提供すべきなのかを考える必要があるだろう。

（ほしの　わたる・文化通信社）

新しい年度にあたって——代表幹事あいさつ

白水社 佐藤英明

二〇〇五年五月二十日に開催された人文会年次総会において、前代表幹事大江治一郎氏（東京大学出版会）に変わって、私、白水社の佐藤英明が代表幹事に選出されました。身の引き締まる思いであります。初代の中平代表幹事（東京大学出版会）にはじまって、私で六人目の代表幹事になります。今年は三十八年目にあたる年で、四十年に向け橋頭堡を築く大事な年だと認識しております。書記幹事の新保卓夫氏（誠信書房）と会計幹事の平石修氏（御茶の水書房）は留任で、三名で三役を構成いたします。また、販売委員長には浴野英生氏（草思社）、弘報委員長には鎌内宣行氏（春秋社）が就任いたしました。両委員長も留任で、心許ない代表幹事ですが、これから一年間よろしくお願い申し上げます。

さて、昨期の活動も活発でした。六月の「特約店グループ訪問」に始まって、九月の「北京国際図書展視察」、「北関東書店視察」等々、積極的に情報を集め、その他講演会の開催、取次会社との懇談会等、日常の活動も販売委員会を中心に展開して参りました。また、「人文会ニュース」の年三回の発行と「ホームページ」のいっそうの充実を掲げて、弘報委員会もがんばってきました。おかげさまでこの五月下旬にはホームページもリニューアルの立ち上げを終えております。

今期も基本的には年間の活動にそう変わりはないと思いますが、書籍それも特に専門書書籍を取り巻く状況がさらに厳しくなっている中で、いかに読者に情報を与え購買に結びつけていくか、いっそうの努力が求められていると思います。読者、書店、取次、図書館、そしてインターネットとの関わり、業界インフラなど、現在はそれらが複雑に絡み

合い、個々の存在はそこにあるにもかかわらず、なにかお互いが見えにくくなっている状況にあるように思います。会としてどこまで踏み込めるかは別としても、会員社各社が抱えている問題を認識しながら、現在の出版状況を誤ることなく捉え、委員会の活動を基調として運営をしてゆきたいと思っております。

読者と人文会を直接つなぐツールはありませんが、会員各社の媒体、もしくは人文会ホームページを利用してつたとしても情報が読者に伝わればと思っております。また、書店店頭においても、いかに効果的に読者にメッセージを送ることが出来るのか。このことは人文会にとっても大事な活動のひとつであるとして、現在までの人文会の歴史を通して理解できることだと思います。幸いにも、人文会担当メンバーには流通、書店販売に精通しているエース級の営業マンが多数おります。力強いかがりです。今後とも全国の書店様に人文会をご理解いただき、会員各社の書籍のご案内をさせていただきます。と思います。

取次様各社とは、書店とのさまざまな取り組みをご理解いただき、そのバックグラウンドとして日頃の情報交換を積極的に行ってゆきたいと考えます。読者、書店、図書館などへの働きかけの基調には取次との連携が不可欠だと認識しております。

二〇〇四年の出版物の売上が八年ぶりにプラスに転じております（出版科学研究所発表の推定額）。また、一ヶ月の平均読書冊数もわずかですが前年に比較して持ち直しているという統計もあります。こうした数字が専門書にも当てはまるよう、今後を見据えてゆきたいと思えます。人文会を構成する担当メンバーも五年前に比較するとだいぶ返っております。会員各社におきましても、新しい時代に対応すべくさまざまな試みがなされているとは思いますが、人文会をさらに盛り立てていただき、自社の糧となるようご協力をお願いいたします。今後も活動する人文会を目指して努力いたします。

（さとう　ひであき・白水社常務取締役）

第三十八期（二〇〇四年度）人文会年次総会報告

書記幹事 新保卓夫

第三十八期（二〇〇四年度）の人文会総会は、去る五月二十日、鬼怒川グランドホテル別館において全会員社出席のもとに開催されました。

二〇〇二年五月（第三十五期総会）より代表幹事を務められた大江治一郎氏（東京大学出版会）は、今総会をもって退任され、新代表幹事には佐藤英明氏（白水社）が選出されました。

議事は、昨年度の全般的な活動報告から始まり、会計報告、販売・弘報の委員会活動報告と続き、役員の改選を行い、無事終了いたしました。

また、今総会にて青木書店、晶文社の休会が了承されました。

委員会構成は、昨年に引き続き販売委員会の下に企画・調査・図書館の三グループ、弘報委員会の下に弘報・ホームページの二グループ体制を継続することになりました。

担当者の変更は、大月書店（大和氏↓駒谷氏）、東京大学出版会（大江氏↓橋元氏）、みすず書房（田崎氏↓持谷氏）の三社です。

役員及び委員会構成員の詳細は、巻末の人文会名簿をご参照ください。

委員会活動方針

販売委員会

販売委員会委員長 浴野英生

先期に引続き販売委員会を担当いたします。販売委員会では、グループにとられずテーマによって有機的に活動していきたいと思っています。会に対するご提案ご相談はどんなことでも、誰にでもお申し付けください。今期は以下の三つのテーマを大きな目標として活動いたします。

一、先期、企画グループが取り組み始めた人文書の中のジャンルの見直しを今期中に完成する。

二、書店さんに喜んでもらえる研修の新しい方法を模索し、実際に行なってみる。

三、図書館さんとのコネクションを再構築する。

それぞれ大変大きな課題ではありますが、成し遂げれば今後につながる大きな成果となるでしょう。

幸いにも販売委員会にはベテラン、中堅、若手とバランス良く人材が揃いました。今期もどうぞよろしくお願いいたします。

委員会のメンバーは次のとおりです。

企画グループ

◎浴野英生（草思社）

西谷能英（未來社）

小林丈夫（慶應義塾大学出版会）

橋元博樹（東京大学出版局）

○段塚省吾（紀伊國屋書店）

華園 斉（創元社）

持谷寿夫（みず書房）

図書館グループ ○杉田啓三（ミネルヴァ書房）

藤代俊久（平凡社）

駒谷光彦（大月書店）

（◎委員長／○副委員長）

弘報委員会

弘報委員会委員長 鎌内宣行

昨年度に引き続き弘報委員会を担当することになりました。どうぞ宜しくお願い致します。

今年度の弘報委員会は昨年同様「人文会ニュース」の年三回の発行とリニユーアルした「ホームページ」の活用で、皆様方に人文会活動をご理解いただき人文書の普及にお力をお貸しいただくための質の高い情報提供を心がけたいと考えています。

総会前によくリニユーアルすることが出来た「人文会ホームページ」の基本図書検索は現在六千点余りの基本図書（人文会会員社以外も掲載）と会員社の新刊を検索・注文（会員社に限る）が出来るようになりました。今後はこの基本図書の充実をはかり皆様の業務に使えるホームページとして進化させていきます。また、人文会総体の活動や、各委員会の活動などもリアルタイムにご報告したいと思います。また、「人文会ニュース」の記事も掲載するなどしてより広く人文会を知っていただくことも考えています。

委員会のメンバーは次のとおりです。

弘報グループ

◎鎌内宣行（春秋社）

成田共助（法政大学出版局）

吉武 創（勁草書房）

ホームページグループ ○平川恵一（筑摩書房）

江波戸茂（日本評論社）

馬場正彦（吉川弘文館）

（◎委員長／○副委員長）

人文会ホームページ・リニユーアルのお知らせ

本年五月に「人文会ホームページ」のリニユーアルを行いました。ながらく改訂中で皆様にご迷惑をおかけしていた基本図書検索と会員各社の最新刊検索が出来るようになりました。予定より大幅に遅れたことをお詫び申し上げます。

人文会は二〇〇三年に創立三十五周年の記念行事として『人文書のすすめⅢ』を刊行し、特約店の書店様にも販売をいただきました。また、図書館様にも蔵書をお願いいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

リニユーアルの中心は基本図書検索です。『人文書のすすめⅢ』に掲載されている人文基本図書約六千点（『人文書のすすめⅢ』刊行後の会員社の最新刊も含む）の版元別・ジャンル別検索はもちろん各ジャンルの必備基本図書中の基本図書別（これは書店様の協力を得て選書したもの）の検索、また会員社に限りませんが最新刊の検索も可能になりました。

それぞれのデータはダウンロードすることによりエクセル表示にして欠本調査やフェア選書の資料としてお使い頂けるのではないかと考えています。また、注文についても会員社に限りですが検索↓印刷↓FAX注文という手順で出来るようになっていきます。

この他、人文会の会活動のリアルタイムでの掲載や小誌『人文会ニュース』の記事の掲載なども開始いたしました。

人文会としては会ならではの特徴を出したコンテンツを皆様方にご提供すべく模索してきましたが、人文書基本図書のアップはその一歩だと考えています。そもそもこの基本図書は選書の段階から書店様にご協力をいただいて出来上がっています。各ジャンルの見直しや、基本図書のさらなる充実も含め今後も書店様とともにこのホームページの質を高めたいと考えています。

ぜひ「人文会ホームページ」をご利用して頂くとともにご意見、ご助言などお寄せいただければ幸いです。なお、小誌次号では現場の書店様の声をレポートする予定です。

弘報委員会

人文会ホームページリニューアルのお知らせ

<http://www.jinbunkai.com>

人文会ホームページで基本検索、新刊検索が出来るようになりました。

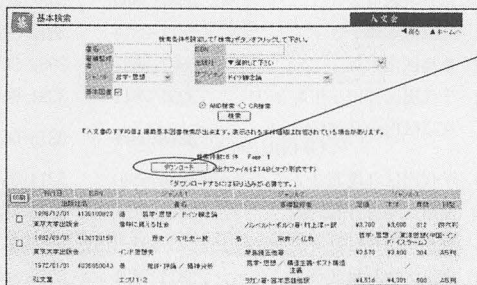
人 人文会について、会員名簿、特約店名簿が見れます。

文 「人文会ニュース」の中から随時掲載します。

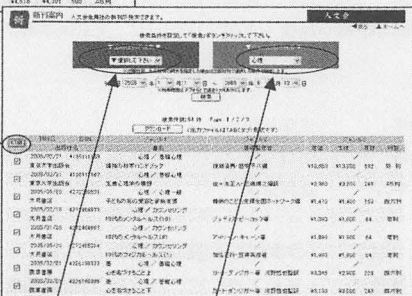
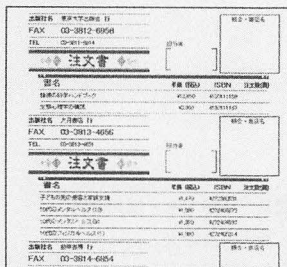
会 販売員会、弘報委員会からのお知らせを随時掲載します。

基 「人文書のすすめ3」収録基本図書一覧の検索が出来ます。
(ジャンル別検索、書名、著者、ISBN、出版社での検索が出来ます。)

新 人文会会員社の新刊検索ができます。表示は全てISBNコード順です。
(出版社別検索、ジャンル別が出来ます。)



検索結果のデータをTAB(タブ)区切りで出力できます。Excelなどでご利用ください。



人文会会員社別検索がジャンル指定(会員社社対象)で検索出来ます。表示はISBNコード順です。

人文会会員名簿

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-24 白水社内

2005 年 7 月末現在

社 名	担当者	〒	住 所	電 話	FAX
大 月 書 店	駒谷 光彦	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塚 省吾	150-8513	渋谷区東 3-13-11	5469-5918	5469-5958
慶應義塾大学出版会	小林 文生	108-8346	港区三田 2-19-30	3451-6926	3451-3124
勁 草 書 房	吉武 創	112-0005	文京区水道 2-1-1	3814-6861	3814-6854
春 秋 社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
誠 信 書 房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
創 元 社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草 思 社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑 摩 書 房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元 博樹	113-8654	文京区本郷 7-3-1	3811-8814	3812-6958
日 本 評 論 社	江波戸 茂	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
白 水 社	佐藤 英明	101-0052	千代田区神田小川町 3-24	3291-7811	3291-8448
平 凡 社	藤代 俊久	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル)	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7	5214-5540	5214-5542
み す ず 書 房	持谷 寿夫	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町 1	075-581-5191	075-581-8379
未 來 社	西谷 能英	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉 川 弘 文 館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

(休会：青木書店・晶文社・有斐閣)

代表幹事 佐藤英明
 会計幹事 平石 修
 書記幹事 新保卓夫

(◎委員長 ○副委員長)

販売委員会 ・企画グループ ◎浴野英生・西谷能英・小林文生・橋元博樹
 ・研修グループ ○段塚省吾・華園 斉・持谷寿夫
 ・図書館グループ ○杉田啓三・藤代俊久・駒谷光彦
 弘報委員会 ・弘報グループ ◎鎌内宣行・成田共助・吉武 創
 ・ホームページグループ ○平川恵一・江波戸茂・馬場正彦

「治安国家」拒否 宣言 「共謀罪」がやってくる

斎藤貴男・沢田竜夫編著 話しただけで罪になる！ 21世紀型〈監視・密告社会〉の骨格となる法案の問題点を明確にする。1785円

なぜ「話」は通じ ないのか

コミュニケーションの不自由論

仲正昌樹 知識人から2ちゃんねらーまで、困った人々の増殖は社会に何をもたらすか。蔓延する「話が通じない病」を撃つ。1680円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話03 (3255) 4501 価格は税込
<http://www.shobunsha.co.jp>

フリーターと
ニート
小杉礼子 編



小杉礼子 編

フリーターと ニート

▶ 大好評3刷 ◀

若者たちのかかえる困難の実態を深くとらえ、次のステップに向けた議論の土台を提供する。1995円

小杉礼子 ▶ 好評7刷 ◀

フリーターという生き方

まず事実を知ろう。多様な働き方に関する厳密な調査報告。2100円

勁草書房 * 価格税別
<http://www.keisoshobo.co.jp>

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
TEL 03-3814-6861 FAX 03-3814-6854

マンガで学ぶ フォーカシング入門

からだをとおして自分の気持ちに気づく方法

村山正治監修 福盛英明・森川友子編著 見て読んで知らぬ間に体験できてしまう画期的入門書。1995円



アーサーはなぜ 自殺したのか

E.S.シュナイドマン著 高橋祥友訳
33歳の前途有望な青年が遺書を遺して自殺。彼を巡る人々へのインタビューと専門家の意見から自殺の真相を探る書。

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL 03-3946-5666 (税込)

話題の本

わたしたちの 脳をどうするか

ニューロサイエンスとグローバル資本主義

● C・マラブー／桑田光平＋増田文一朗訳

脳科学が解明する人間の可能性と、そこに労働者管理の新たな方法を発見した資本主義の深化を問う、フランス哲学の新潮流。2205円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
電話03-3255-9611 (価格+税込)
<http://www.shunjusha.co.jp/>

一字一句を詳細に読み解く!

森本和夫著

▼全10巻完結

『正法眼蔵』 読解

日本文化史上、仏教思想史上屈指の名著『正法眼蔵』。その真髄はテキストにある。「七十五巻本」と「十二巻本」および拾遺の全文を各段落ごとに掲げ、それぞれ精緻に読み解いた前例のない画期的文業。◆詳細内容見本呈

【愛蔵版】

A5判・上製・本文14級 セット47250円

【ちくま学芸文庫版】

美麗ケース入 セット13650円

サービスセンター **筑摩書房** 048-651-0053
*税込 <http://www.chikumashobo.co.jp/>

創元社

夜の記憶

——日本人が聴いた
ホロコースト生還者の証言

澤田愛子著 サバイバー(生還者)二人が、恐怖と不安を乗り越えて日本人に語った真実の言葉。 三三六〇円

「知の再発見」双書122

ヨーロツパ統合

田中俊郎監修 巨大な政治共同体であり、今なお拡大し続けるEU誕生までの道のりとその展望。 一五七五円

カウンセラーのための基本104冊

氏原寛・下山晴彦・東山紘久・山中康裕編 基本の必読図書を紹介したブックガイド。最新大改訂版。 一六八〇円

大阪市中央区淡路町 4-3-6 (税込価)
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
東京都新宿区神楽坂 4-3 Tel.03-3269-1051
<http://www.sogensha.co.jp/>

教養のためのブックガイド

小林康夫・山本 泰編 何を讀んだらいいんですか? —「大学改革」のなかで、数少なくなつた教養学部の一つ東大教養学部が、教養教育の実践として新入生に提示するブックガイド。本を読むことの楽しさと喜びを通して、大学の豊かな可能性を伝える決定版読書案内。 A5判・二四〇頁／一六八〇円

若者と仕事

「学校経由の就職」を超えて
本田由紀 フリーター、ニートの急増に見られるように、日本の若者と仕事の現状はきわめて厳しい局面にある。著者は、こうした現状の背景にある日本独特の要因として「学校経由の就職」の機能不全と「教育の職業的意義」の不在を指摘し、具体的な打開策を提案する。

A5判・三三頁／三九九〇円

東京大学出版会

文京区本郷7-3-1東大構内 ☎03-3811-8814



鳥居民

トルーマンはなぜ、ソ連参戦の期日に拘泥し、「ポツダム宣言」から天皇の地位保全条項を削除したのか。大統領と側近バーンズの動きを繋げ、「やむをえず投下した」の通説を覆す。

原爆を投下するまで 日本を降伏させるな

トルーマンとバーンズの陰謀 定価1680円

草思社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8 定価は税込価
☎03(3470)6565 <http://www.soshisha.com/>

イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置

ルイ・アルチュセール 著／西川長夫ほか 訳

現代の思考に巨大な影響力を及ぼし続けるアルチュセールのイデオロギー論。生前未刊の草稿により、再生産論という本来のコンテクストの中で初めてその全貌を現す。待望の邦訳！ A5判/476頁 ●6090円(税込)

封印された日朝関係史

高崎宗司、朴正鎮 編著

1959年からの「帰国事業」によって、9万人以上の在日朝鮮人が北朝鮮に渡った。彼らは理想を夢みたのか、それとも騙されたのか。本書は、この問題に取り組んだ初めての研究論集。 四六判/382頁 ●3570円(税込)

平凡社 〒112-0001 東京都文京区白山2-29-4
TEL 03-3818-0874 <http://www.heibonsha.co.jp/>

天城一傑作集2

天城ミステリ第2弾

天城一〔著〕 日下三蔵〔編〕

HE05-3

二〇〇五年度本格ミステリ大賞受賞！

天城一の密室犯罪学教程

天城一〔著〕 日下三蔵〔編〕

◆2640H

●日本評論社

東京都豊島区南大塚3-12-4 (価格は税込)
TEL:03-3987-8621 <http://www.nippyvo.co.jp/>

<http://www.h-up.com/>

食や性をはじめとする異文化との
出会いが、葛藤や偏見・誤解を生
み出し、過程とその構造・道生後
期の旅の記録に探る。5250円

世界の体験

F・ライヒェルト／井本・鈴木訳

A・ホネット／加藤・日暮・他訳

正義の他者

実践哲学における体系的課題を独
自の承認論を展開させて分析し
正義の原理とその他の「他者」の関
わりに照明を当てる。5040円

ベルクソンとバッシュラール

M.カリウ イメージと隠喩、直観と否定、認識論と形而上学などをめぐって、テクストを介した両者の対話を目論み、その結節点を探る。永野拓也訳／2100円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

●インド独立運動と近代日本のアジア主義●

中島岳志 著

ナシヨナリズムの功罪を描く渾身の力作

R・B・ボース。一九二五年、日本に亡命したインド独立の闘士。アジア解放への希求と日本帝国主義との狭間で引き裂かれた、懊悩の生涯とは――。

「これほど興味深い本にはめつたに出会えるものではない。」
小熊英二氏推薦！

2310 田

白水社

東京都千代田区神田小川町 3-24
tel.3291-7811 / fax.3291-8448
akusuisha.co.jp *価格は税込

美術史の7つの顔

小林康夫編

顔を描いた7作品の分析から、
絵画の問いと顔の謎に迫る！
ベラスケス、レンブラント、ピカソ、
ジャコメッティ、ウォーホルなど。2730円

即興術

シアターゲームによる
俳優トレーニング

V・スポーリン著／大野あきひこ訳

究極のコミュニケーションツール
としてのインプロ。

唯一無比、史上最強の
実践的ワークショップテキスト！ 2940円

未来社

※価格は税込

東京都文京区小石川3-7-2 〒112-0002
tel.03-3814-5521 www.miraisha.co.jp

時のしずく

中井久夫 「私」についての深い省察のもとに、歴史と記憶を鮮やかによみがえらせる。最新エッセイ集 2100円

関係としての自己

木村敏 豊富な臨床経験と生命や存在への透徹した眼差から自己という謎に迫る。木村人間学の到達点。2100円

いのちをもてなす

環境と医療の現場から
大井玄 内科医として、国立環境研究所所長として、人間と環境の生命をもてなしてきた道程をつづる。2620円

生きることを学ぶ、終に

デリダ 病と戦う哲学者が、自身の仕事や世界の未来について力強く言い遺した最後の対話。鶴岡哲訳 3100円

みすず書房 (税込)

東京文京本郷5-32-21 http://www.ms2.co.jp

日本史総合年表

第二版

待望の第二版！

最新の「日本史年表」決定版
『国史大辞典』別巻

加藤友康・瀬野精一郎 四六倍判上製 函入 二一八四頁
鳥海 靖・丸山雍成編 一四七〇〇円 『内容案内』送呈
①一〇〇〇〜二〇〇四年に至る五年間の年表を増補②一六〇〇〜一八六七年に至る二六七年間の年表について、それ以前と同様に各項目に典拠を追加③一八六七年までの年表に示した典拠を「典拠一覧」として収録④「備要」の西暦・和暦対照「一覧」・歴代内閣一覧・国会一覧、衆議院議長、参議院議長、政党内閣主要系統図について、二〇〇〇年以降の変更に追加⑤増補分を含めた索引に改訂

吉川弘文館

価格
税込

東京都文京区本郷7-2 / 電話 03-3813-9151

ミネルヴァ書房

◇貴重な絵本600点をオールカラーで収録！
カラー版
小さな絵本美術館
鳥越信著 A5判美装カバー 192頁 二八九〇円

◇鳥越信編 好評既刊

はじめて学ぶ日本の絵本史 (全3巻)

- I ●絵入本から画帖・絵はなしまで 三一五〇円
- II ●15年戦争下の絵本 三一五〇円
- III ●戦後絵本の歩みと展望 三三六〇円

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 宅配可 / 価格は税込